

報



會

會 岳 山 本 日

67

月 六 年 二 十 和 昭

山 の 繪

田 口 一 郎

あるひとの筆になる富士の繪が最近僕の家に來た。三峠あたりからの墨繪と箱根からのものらしい油繪との二枚だ。繪の全くわからない僕にもさう下手な作品だとは思へない。だが見てゐる中に何となく物足りないのである。座敷の飾り物としてならば感激もない代りに飽きもしないところが山が富士であり、これは「山」の繪だと思つて見るとこの繪が僕に何も訴へてゐないことにおどろくのである。

全體のバランスはいゝ、色合も美しい、近景と富士の間を埋めつとした雲海は今にも動きださうだ。だが見詰めるとそれはたゞ小奇麗なバランスにすぎないし、山で感ずる空の色、雪の色、地肌の色とこの繪の色合との間にはいふにいはれぬへだまりがある。山の雪とこの繪の雪とは同じ白色 あり乍ら僕には白と黒よりも別の色に見えるのである。雪の大澤から器用に吉田口の森林にわけこんだ濃淡の變化は厳しい氣候にさからつて上へ上へと這ひ上る森林帶上限を感じさせないし、その日の天氣の聯想まで導きだす山の雲海の魅力はこの繪にない。

拙い説明はこの位にして僕の云ひたいのは、この畫家が山を知らない

——實際山登りなぞはしたことがないさうだ——ことが山好きのものを満足させる繪が出来ない原因だ、このことなのである。ある程度の繪筆の技術があることは勿論必要な前提だらうが、更に山を知ること——それには結局山登りをするより仕方がないらしい——がその人の繪を「山」の繪にまで引きあげる動力だらうと思ふのである。

同じことが近頃諸々の寫眞雜誌に汎濫する山の寫眞に就てもいえ。露出、絞、フィルター、フィルム、皆申分のない條件がそろつてゐるし構圖も懸賞に當選し、雜誌に發表されるのだから寫眞の批判には耐へたものだらう。それにもかゝらず、僕はこれらの寫眞にグイツトリオ・セルラはいふに及ばず、仲間の怪しげな器械と腕で撮られたにすぎない寫眞にさへおぼへた感興をもつことが出来ないものである。ある寫眞雜誌に最初はすばらしいと思つた作品があつた。中尾峠あたりらしく前面に立つ大きな枯木にピントが合ひ、その木の銀色の肌は夕陽に明く輝いてゐる。明神岳はうすくぼかされて調和のとれた背景をつくり、底部の熊笹と遠山のコントラストは全く美しい。たしかにすぐれた寫眞ではあつたが、そのうちに物たりなくなつたのは、この寫眞から秋の中尾峠であるいた時の感興を引き出すことが出来ないからなのだ。山に來て寫した寫眞ではなく、寫眞を撮りに山に

來た時の收獲である。結局この作品が僕に與へた感銘はこんなものだった。作者の對象に對する愛と認識の不足はシャッターさへ切れば何かは寫るだけに寫眞の場合に一層眼立つのではないだらうか。楽しい、純な山登りに撮られた寫眞はたとひ貧しくとも、うらにその山登りの氣分が滲み出ずにはゐない底力をもつてゐるのだ。

こういう僕の見方がいゝか悪いか見る僕が無智であり、我まゝであるといつてしまへばそれまでだ。だが山登りの歴史から見れば山を最もよく

パウアー以後のシツキム登攀

次に掲げるのはパウアーの第一回カンチ登攀（一九二九年）以後に行はれたシツキムに於ける登攀の跡を山岳別に取扱つたもので、H・J第九號所載の資料を骨子とし、これに筆者が多少の加筆を行つた。原資料にはこの外に山岳の位置や關係文獻なども簡単に要領よく併記されてゐるが、こゝではそれを全部省略して以下に見られる程度に簡略にした。

例により山名及び高さは便宜的に取扱つた故、必ずしも正確でない、項目は山名、山の高さ（米）登攀の年月登攀者等の順序である。山岳は五十音順に配列した。（TK生）

カフルー

七三一五
一九三五・一一、クツク（一八八三、

知りよく理解したのは、山を本能的に愛した山岳人であることを思へば山に關する藝術作品が藝術的であり得るためには山登りの氣持が織りこまれることが必要であるといふ大見得もあながち見當違ひだとは考へられないのである。たゞ山を對象としたといふだけの理由で鑑賞を押しつけられる諸々の「山」の繪、寫眞、文學音楽よりも山とは全く無關係な作品が山登りで、おぼへる様なすがしさを僕にあたへてくれるのである。

一〇グラハムが登つたと傳へられ、一九〇七、一〇、ルベンソンとアスガ頃上直下一〇〇呎に達した。）
カン・ピーク 五五七二
一九三〇・四 ヘルリン、シュナイダー（西部國境）

カンチエジュンガ

八五八〇

一九二九、パウアー等北東稜より七四〇〇に達す。

一九三〇、デイレンフルト隊六四〇〇に達す。

一九三一、パウアー等北東稜より七七〇〇に達す。

「クレヴァスピーク」

五九二〇

一九三六、パリスとクツク

「グリーン・レイク・ピーク」不明
一九三六、一〇、パウアー、ゲッ

トナー(パドン・ラ近附)

シムウー群

一九三六・五、パリス、チャブマ

ン、クツク(六五五〇米峯)試登。

一九三六・一〇、パウアー、ゲッ

トナー、ベツブ(六五四五米峯)

(ケラスが一九〇七、三回の試登し

たのは六七九〇米峯である用)

シニオルチュ

一九三六・九、ウィーン、ゲット

ナー

ジョソソ・ピーク

一九三〇・六、(a)ヘルリン、シュ

ナイダー、(b)スマイス、ウイラント、

タルツ、ディレンフルト。

「シュガローフ」

一九三一・九、アルワイン、ブレ

ンナー(ツウインスの東)

「セントネル」

一九三五・七、ティルマン、ウイ

グラム(一九一〇・五、ケラスが登つ

た。チーヨーテン・ニム・ラの北)

チヨミヨモ

一九三二・一〇、スベンスとヘイ

ルが試登、二一〇〇〇呎まで。

一九三三、ゲールレイ二二〇〇〇

呎まで試登。

(一九一〇・七、ケラスの登攀が最

初)

チヨーテン・ニーマ・ラ

一九三五、ウイグラム、ティルマ

ン。

「ユーモンコ

一九三三、シブトン、ハリス、ウ

エイジャー、ロングランド。(東部)

ドーダン・ニーマ

一九三〇・六、ヘルリン、シュナ

イダー。

ネパール・ピーク

一九三〇・五、シュナイダー。

一九三六・一〇、ゲットナー、ウ

イーン(この兩回の登攀せる頂は夫

々別個のものかも知れない)

「ビドン・ラ・ピーク」

一九三六・一〇、パウアー、ゲッ

トナー(位置及び高さ不明)

「ピラミッドピーク」

一九三六・七、チャツブマン、ハ

リスン、クツク北西稜より試登、そ

の稜上の一峯「スフィンクス」に登

る。

「プマカンツオ(ゴルダマ)西峯

ス、(ゴルダマ湖の南)

「フリーテッドピーク」

一九三二・六、オスマストン等頂

上直下二〇〇呎まで試登。

一九三六・六、チャツブマン、ハ

リスン、クツク。

「ブラック・ピーク」

一九三六・一〇、パウアー、ゲッ

トナー(パドン・ラ近附)

「マウス」

一九三〇・五、スマイス、シュナ

イダー(カンチの北西稜)

「ラチシ」

一九三六・五、ハムブリン、フイ

ンチ二〇〇〇呎まで試登。

「ラーゲルベルク」

一九三六、ニコルソン、クツク。

ラムタン

一九三〇・五、スマイス、シュナ

イダー(カンチの北西稜)

「リクロ北峯」

一九三六・八、ベツブ・ゲットナ

ー(シニオルチュとラマアンデンの

中間)

「ローナク・ピーク」

一九三〇・一〇、ゲールレイ、エ

バースドン。

一九三三・七、シブトン、イラ・

キタール。

◇圖書紹介◇

山・原野・牧場

坂本 直行著

「山」に一年近くも連載された「ある牧場の生活」がこんだこういふ名を冠して出版されることになった。「山」の微笑ましいこの読みものはそれに挿入された数多いカットの故にまた眺めて楽しむものであった。氏独自の感じたままを片端から書きなぐつたやうな、荒削りの文は、あの線の太いカットとよきコンビをなして私達を一年近くも喜ばしてくれたものであった。それが今こゝに一冊にまとまつたのだから又新しい興味を有つてこれを迎へてもよいわけなのである。本書の内容についてはこゝに紹介する必要を認めない。要

するにこの一冊は厳密な意味の山の本でないかも知れないが山を深く取材した牧場生活の一年の記録とでも見たらよからう。それで、本となつたこの一冊について感じた二三の點を少し書いて見やうと思ふ。

「山」の場合であると、一回に出た分はせいぜい五六頁で、それに少くとも二三枚のカットがついてゐたから、この場合には読み且つ眺めるといふこの原稿の目的は充分に達し得られたし、文がよくカットを説明しまたカットはよく文を生ずことに成功したのである。

しかし、こう一冊になつて読んで見ると、どうも物足りない感じを受けないでは居られない。といふのはこの本ではカットが前の半分位しか使はれてゐない。それがために何だか物淋しさをうけるのではないか。私から見ればもし、カットを用ふるならば、もつとふんだんに用つて貰ひたかつた。そうすれば「山」の場合と同じやうな目的が達せられたのに惜まれてならない。カットを全部止めて了へば、それでもよいが、この場合には「北の山」で見たやうなアツサリした繪を五六枚挿んでもらひたかつた。むしろ私の考へではこの場合著者の文はカットの必要のないやうな繪畫的な筆であるから、かうした方が成功したのではなかつたらうかと今にして考へられる。

またカットの位置が出鱈目に挿まれてゐるので文も全く無關係な

ものになつて了つてゐるし、また惡くつてコトツン紙などを使つたのだから、あの太い線は見事に打消されて、雨か霞に包まれた風景になつて了つたことも惜しい気がする。

あまり注文ばかりのべてしまつたやうだが、著者のこの出版の意圖がどこにあつたか私の知る限りではないが、本としては要するに讀み本としても眺めて楽しむ本としてもどつちつかずの中途半端なものになつてゐることは確かであらう。

恐らく著者としての最初の出版がかくもスポイルされて了つたこととして本屋にしてやられて了つたことそして恐らく著者の最初の計畫と似ても似つかぬものになつて了つたことを著者のために残念に耐らないしまた同情せねばならない。これも著者の「遭難」のよい一例であつた。

(黒田記)

ヒマラヤンジャーナル

第九號(一九三七)

最近出たもの「エクスペディション」の数だけでなく、その行つた諸國の種類から云つても一九三一年のヒマラヤは記念さるべきであるといつてゐる。この年の總括括りとしての本號が大物ばかりの獲物を集めてゐるのは云ふまでもない。ラットリッヂのエベレスト、スベンダーの同測量、ティルマンのナンダデヴィ

◆ 會員通信 ◆

山、郷土

グインのシニオルチュとシング、シブトンのナンダグレイ測量、フランスのカラコルム、K26などが主な記事。ナンダグレイの記ののりなかつたのはいさゝか物淋しい。たゞ會務報告に「ヒマラヤへの日本の最初の遠征がホーハ氏(?)の指揮でナンダグレイに行かれて成功した。」と簡単に報ぜられ、「この登攀の細目が何等送られて来ないのは残念だ」と編輯者が附言してゐる。ともあれ早く文として見たたいのはこの編輯者のみでなく、我々の一同期待する所である。

一九三七年の分として、ドイツのナンガバルバット、一九三八年の分としてドイツのカンチ、フランスのガツシエルブルム、それに、カラコルムへの日本の一隊が豫定されてゐる。

何れにしても讀みごたへのあるもの。ゆつくり讀みたい。シツキムの登攀(本誌所載)もHJの資料で、HJ第二號のトビンのそれを補ふものである。

この會のヒュツテも、最近シツキムのモーム・サンドンに建てられたらしく、アルプスのそれを寫眞やなにかで見ても我々の目には風がはりなものである。

他の寫眞も何れも問題なし。

ヒマラヤへの關心がいよゝゝ高められるとき、かくも讀み應へのある第九號を送られたことは我々の大きな喜びでありよい刺激であらう。

(TK生)

五月二十三日の日曜日に晩春の手稲山に登つた。北海道の春は概して本州よりは一月位は遅れて居るから札幌では漸く櫻が散つて、梅や桃の花ざかり。眼も覺める様な落葉松の新緑の梢、輕川小學校裏から山の頂きまで、鶯の聲を耳にし又山鳩の啼き聲を耳にする。バラダイスヒュツテの傍を流れる谷川の音にも、春の生命をたゞえる水流の勢ひが満ちて居る。こゝから目をそゞと、手稲山六合目あたりから頂上まで、未だに豪雪をたゞえて居る。夏道に沿ふて雪解で水量の増して居る谷間を廻り、やがて雪溪を踏み締めて頂上臺地に出る。頂上の指標からの展望は見事なものだつた。北の方には洋々たる石狩灣とそれにそゞ石狩川の白きうねり。その北方に連互する暑寒別岳一帯の山々は白銀の姿だ。

南の方を見ると東から樺前山、惠庭岳、漁、空沼、サウス、札幌岳、ムイネ山、遠く羊蹄山を望んだかと思ふと、餘市岳、朝里岳、等千米突以上の山々、みないづれも残雪をいたゞいて春光に照り映えて居る。ゾンメルスキーで滑降を楽しむ事が出来てうれしい。同好の連中十名餘り下界は初夏だと云ふのに、札幌から僅か數軒、而も札幌を眺め乍ら、千米の頂上でスキーを楽しむ事が出来る。

此の手稲山は札幌から一番近い山で、高さは千二十三十米。汽車で札幌から登山口の輕川驛まで二十分餘りで汽車賃十八錢。登り易く山氣分が満喫出来るから大衆的に、冬も夏も親しまれて居る。冬は冬でスキーの快味を山頂より味ふ事が出来、夏は夏で又別な山の味がある。

手稲山に登つてから早十幾年、一年に三四回は必ず登る。そしていつも我郷土を見渡し、折け、嶺がり行く様に此の上ないよるこびを感ずる私は山友とよく山頂での物語りを好む。石狩平野に開け来る郷土、そして開拓の先人の功業を偲ぶにはどうしても地圖を眺め、その土地を山上から指呼するに限る。六月頃からは本州方面よりの旅行團が多くなる。我が住む郷土をよく認識し、いたゞいて北方文化の開發に關心を持たれることを望んで居る。實に北海道今日の發展は擔ひなき先人達の努力の賜だ。國亡びて山河在りと云ふ事があるが、未だ開拓の歴史の淺い北海道では、先人亡くして文化新なりとの感慨が深い。我々は今日の郷土北海道を思ふにつけ、開拓の先人に對して深き感謝を捧げざるを得ない。

私はよく山に登る。よく村落を訪ねる。旅行によつて郷土の認識を新にしたいからである。郷土の發展は期するところ、住む人一人一人の努力の結合に外ならぬと考へて居る。

(札幌 鹽田輔雄)

第八十一回小集會記事

六月三日(木)午後七時於三會堂山岳語彙に關聯して、左の兩氏に講演をお願いした。來會四十名はいさゝか物淋しかつたが、いづれもこの方面に深いインテレストを持たれる熱心な者ばかりの小さい集ひであつた。

一、山間のアイヌ語

文學博士 金田一京助氏
〔要旨〕 今僅かに本州山間に残つてゐる山間の人々の山言葉から二三の實例をひいてそれとアイヌ語との關係を説き、更に漁撈者間に於ける言葉とアイヌ語との關係、東北に残る地名とアイヌ語との關係に及び、更に、現在、これらの言葉の残る方面の人々と現代アイヌ人との關係につけて二三の推定を下された。この要旨は何れ「山岳」にも書き下して頂くことにした。熱のこもつた人をひきつける氏の講演に時のうつるのも忘れて拜聴、大いに感銘を深うしたことである。約一時間半。

一、越後獵師の話

會員 高橋文太郎氏
古來山と關係深い職業者について前置きされ、その一つのマタギ、特に最近旅行された飯豊山麓赤谷村瀧谷を例としてマタギの生活習慣を報告され、彼等の間に於ける入團式等の奇習について一言され、最後に會のやつてゐる山岳語彙の採集についてその意味を明にせられた。また大いに得る所があつた。

終りに、御多忙中右の講演を快諾せられた兩氏に深く感謝の意を表す(黒田記)

來會者
武田久吉、酒井忠一、多賀富藏、高頭仁兵衛、中村テル、岩崎吉二郎、英木猪之吉、大熊保夫、關根吉郎、磯貝男、大坪藤麿、外山義夫、荒井道太郎、黒田孝雄、吉澤一郎、木村鐵吉、新庄球生、田邊主計、村尾金二、近藤恒雄、淺原重繼、矢作太郎、吉田竹志、橋本晋十郎、松方三郎、田口一郎、石原巖、藤澤乙三、島田巖、角田吉夫、高橋文太郎、福田嘉四郎外二八名

山岳第三十一年第二號正誤

頁	誤	正
六六	六〇〇米	六〇〇—七〇〇米
六七	下界	下限界
七二	など占	などの古
七六	普通	普通
七八	ウラジロモミの布上限分	ウラジロモミの分布上限
八〇	認ある	認める
八二上	去昭	去る
八九	青木勝	青木勝
九〇	穂笠	穂高笠
九四	一回	(創ル)
九四	アルプス	アルプス全體



會務報告

新着圖書
ケルン 六月號 同 編輯室
山小屋 同 朋文堂
寫眞月報 同 小西六本店
ツリースト 同 J・T・B
登山とスキー 同 發行所

中村謙著 山と高原の旅 朋文堂
ジ・ヤンコスト 岩・氷・ラング 同
松方三郎著 アルプス記 著者

Mountaineering Journal 3-5

Sierra club Bulletin 2

Natural History 3

Die Alpen 5

Planinski Vestnik 5

S. T. F. 4

購入圖書

W. Merkl: - Ein Weg zum

Nanga Parbat

C. E. Engel: - Les detailes

Pour l'Himalaya

C. King: - Mountaineering

in the Sierra Nevada

編輯後記

個人的な用がたまつたため五月號と六月號の編輯はKにたのんだ。

山のお正月も近づきました。地方及び學校山岳會の近況御報告等精々御投稿をお願いします。

まだ編輯萬端不調ですから會員諸兄の御鞭撻御援助御寄稿を一重に御願ひします。(中司)

昭和十二年六月二十一日印刷
昭和十二年六月二十五日發行

發行所 中屋健次

編輯者 中司文夫

印刷所 東京市小石川區戸崎町一三

發行所 多木印刷所

電話 一六四九番

廣告一手取扱 電話 四六五番

1937

山 日 記

三十圖地入挿一餘挿 頁〇四四判裁半菊
六〇科送〇〇・一價定 裝スローケーザレ

輯編會岳山本日



躍進の氣運に満ち漸く多事ならんとする昭和十二年の登山季節を前にして、新しき「山日記」を以て我が登山界に見えろことの出来るのは非常な喜びである。しかし今年の「山日記」を世に送り出すに當つて我々の持つ喜びは、例年と比べて、一層大きい。我々が年來その實現を期しつつあつた懸案の幾つかが遂に今年の「山日記」に於いて實を結ぶに至つたからである。第一に今年版は徹底的に版の組み替へを行つた。過去の「山日記」と比較されるならば今年版の出来栄の程度が判然りすることと考へるが、この結果今年の「山日記」は全然新なものを作るといふ計劃と意氣込の下に作り上げられた。版の組替の爲めに拂つた犠牲は大きい、その爲めに「山日記」が言葉通り更始一新するに至つたことを考へれば、その犠牲は充分酬ゐられたと見なければならぬ。(「山日記」は「内容概略」を参照せよ)

内容概略 曆 日記欄 登山經歷 自由日記 住所欄 ★ 登山の注意 山岳氣象 冬期登山服装用具食料 登山用品表 食料品目録 登山衛生及び應急手當 山岳高度表 峠高度表 外國高山百七十座(完登未完登の細別) 各國の峠 登山日程表 山小屋 山案内 山岳語彙(本邦及外國) 山岳寫眞要項 登山團體(本邦及外國) 地名解讀 其他 ★ 概念圖十三枚(日本アルプス・上越國境・秩父・氷の山・中央アジア・K2・エベレスト・カンチエンデユンガ) 寫眞雲形十二種

京東替振 店書波岩 田神京東
〇四二六二 橋ツ一